

[解説]

保健医療福祉系学生のためのタスク中心型英語指導

戸出朋子¹⁾, 石原美由紀²⁾

キーワード：タスク中心型言語指導, SF-36, 第2言語習得プロセス

A Report on a Task-based English Instruction to Health and Welfare Majors:

Tomoko Tode, Ph.D., Miyuki Ishihara, RN., RHN.

Abstract

Task-based foreign language instruction aims at developing the interlanguage system through using the target language, that is to say, through completing tasks. This instruction is in sharp contrast to the traditional instruction in which learners engage in mechanical practice of language forms pre-selected by the teacher before producing language in spontaneous contexts. Because the instructional procedures conform to second language acquisition processes revealed by recent second language acquisition studies, increasing attention has been recently paid on task-based language instruction in the field of the foreign language pedagogy including English teaching in Japan. One of the 2008 English-as-foreign-language courses of Niigata University of Health and Welfare, English III, adopted this instructional approach. In the instruction, the students wrote academic reports on the assessment of their own Quality of Life (QOL) by means of SF-36, which is a measure to assess QOL. This paper reports on how the instruction was conducted. It also discusses whether or not the intended acquisition processes occurred in the learners' minds, based on the feedback comments of the class by the students.

Keyword：task-based language instruction, SF-36, processes of second language acquisition

要旨

タスク中心型言語指導による外国語指導とは、目標言語を実際に使うこと、つまりタスク遂行を通して、その言語の言語能力の伸長を促すことを主眼とする指導法であり、教えられた言語形式を練習して身につけてから実際場面で使うという従来型の指導とはパラダイムを異に

する。この新しい指導法は、第2言語の習得プロセスに沿った指導法として有力視されており、日本における英語教育においても近年注目されつつある。新潟医療福祉大学の2008年度英語Ⅲでは、生活の質（Quality of Life）を測定する尺度の1つであるSF-36を使って自己の健康を考察し英文レポートの形で報告する、というタスクを

1) 新潟医療福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科
2) 新潟医療福祉大学 健康科学部 看護学科

[連絡先] 戸出 朋子
〒950-3198 新潟市北区鳥見町1398番地
TEL・FAX: 025-257-4672
E-mail: tode@nuhw.ac.jp

設定し学生に取り組ませた。本稿ではその実施内容を報告する。さらに、この指導を通して意図された習得プロセスが学生の内部で起こったのかどうかということ、授業評価の一環としてとった学生の自由記述アンケートから考察する。

I はじめに

タスク中心型言語指導 (task-based language instruction) とは、第2言語の指導 (母語以外の言語の指導のこと。外国語指導はその一形態) において、目標言語を実際に使うことを通してその言語の言語能力の伸長を促すことを主眼とする指導法である。新潟医療福祉大学 (以下、本学) で第1筆者が担当する平成20年度英語IIIにおいて、生活の質 (Quality of Life: QOL) 測定のための質問票である the Medical-Outcomes-Study 36-Item Short-Form Health Survey (SF-36)¹⁾ を題材とするタスク中心型言語指導に取り組んだ^(註1)。本稿では、その報告を行い、今後の課題を整理する。

タスク中心型言語指導は、従来型の第2言語指導法である3Ps (スリー・ピーズ) 指導法の対極として捉えることができる²⁾。3Ps指導法では、プレゼンテーション (presentation)、プラクティス (practice)、プロダクション (production) の流れで指導がなされる。つまり、この指導では、学習者は、最初に前もって定められた目標言語項目 (例、受動態などの文法項目) の提示及び説明を受け、次にその項目を機械的に練習し、最後に自然発話に近い状況で意味伝達を行うことになる。これは、言語形式 (form) が最初で意味 (meaning) が後、という方向での指導である³⁾。これは、形式についての明示的な知識は、練習を通して、実際場面で使うための知識に直接的に転換する、という言語習得観に基づいている。ところが、第2言語習得研究の発達により、この従来型言語習得観の誤りが指摘され、それと共に3Ps指導法の有効性が疑問視されている。第2言語習得プロセスは解明されているわけではないが、目標言語を使って意味伝達するという経験の中で学習者自身が気づき (noticing) を繰り返しながら知識を徐々に構築していくという道筋がおおかたの統一見解であり、この習得観に基づく指導法がタスク中心型言語指導である。

タスク中心型言語指導は、プレ・タスク (pre-task)、タスク (task)、フォーカス・オン・フォーム (focus on form) という流れで進められる³⁾。プレ・タスクとは、タスク遂行を可能にするための準備となる活動のことで、これを通して、学習者は題材に親しみ、かつ、必要な語彙等に触れる。次のタスク段階では、学習者は現実

に遭遇するような課題を目標言語で遂行することが求められ、テキストなどの参考資料や他者からの助けを得ながら、手持ちの言語能力を最大限に駆使して課題解決に当たる。最後のフォーカス・オン・フォームとは、教師が必要に応じて言語形式に学習者の注意を向けさせる指導のことで、通常、誤り訂正や文法指導の形態をとり、意味重視の活動に文法指導を効果的に組み込んで学習者の能力の伸展を促すことが意図されている。タスク中心型指導では、意味が第一義的であり、その意味伝達のためにはどのような形式を使えばいいのかを学習者は模索することになり、まず意味、そして形という点で、3Psとは逆の方向性をとる指導法といえる^{2) 3)}。

英語IIIにおけるタスクの選択に当たって、保健医療福祉分野の専門職を目指す本学学生のニーズを第一に考慮し、SF-36を材料としたタスクをデザインすることにした。SF-36とは、人間のQOLを測定する尺度の1つであり、一般的なQOLの尺度と区別し、健康に関連したQOLを測定する尺度としてWareら (1993) によって開発された⁴⁾。開発された目的は、医療評価や保健サービス評価のためであるが、調査の対象者自身が健康度を自覚するためのツールとしても活用されている。SF-36は、8つの健康の概念を表す36の項目で構成されており、機能状態 (functional status) や健康状態 (well-being) を対象者の視点から捉えた主観的なアウトカム指標である。英語版のみならず日本語版も発行されており、国際的に最も頻用されている⁵⁾。適用対象は、年代を問わず、一般的な健康状態から慢性症状を持つ対象まで幅広く適応するよう作成されている。使用に際しては、自己記入式あるいは訓練された面接者による面接式のどちらでも実施できる⁴⁾。本授業においては、SF-36の英語版に自己記入により回答することによって自己のQOLを測定し、その結果を考察して自己の健康度の評価を行い、英文レポートにて報告する、というタスクを設定した。この課題は、題材の面でもレポート作成という活動面でも、本学学生のニーズと合致しており、タスクとして成立する条件を満たすと考えた。

II 学習目標

実施に当たって、以下の行動目標を設定した。

- (1) S-F36 (英語版) に回答することができる。
- (2) 使用マニュアル (英語版)¹⁾ を読んで、それによって自己のQOL度を測定し、算出することができる。
- (3) 自己のQOLの評価というテーマで英文レポートを、Introduction、Method、Results、Discussionの構成で書くことができる。

Ⅲ 実施内容

学科 3 名、社会福祉学科 1 名) であった。

受講生は、2 年生 6 名 (理学療法学科 2 名、言語聴覚

14 回の授業で行った内容は、表 1 のとおりである。

表 1 指導の流れ

回	目的	手順
1	SF-36の概要を知る SF-36に回答する	* 第 2 筆者によるSF-36の概要の講義を日本語で聞く * 自己記入式SF-36に回答する
2	SF-36の中の表現に 注意を向ける	* 面接式SF-36を使って面接練習をする * 有用な表現に注意を向け、練習する
3	SF-36の 8 つの健康 概念について理解す る	* マニュアルを読んで 8 つの健康概念を理解する * 8 つの健康概念のうち身体機能 (Physical Functioning: PF) と日常役割機能-身体 (Role Physical:RP) について、 何も知らない人にわかりやすく説明する英文を書く
4	Introductionを執筆 する	* Introductionでは何を書くべきかを話し合う * 各自、第一稿を執筆する
5	Introduction原稿を 改善する	* 学生Aの第一稿の改善点を話し合う * 受動態の復習と練習問題 * 各自、推敲する
6	スコアリングする	* マニュアルを読んでスコアリングの手順を理解する * マニュアルにしたがって、自己のQOL度を算出する
7	Methodを執筆する	* Methodでは何を書くべきかを話し合う * 各自、第一稿を執筆する
8	Method原稿を改善 する	* 学生Bの第一稿の改善点を話し合う * becauseの使い方についての指導 * 各自、第一稿を推敲する
9	Resultsを執筆する	* 算出したQOL度の結果についてペアで英語で話す * Resultsの表し方についての講義を聞く * 各自、第一稿を執筆する
10	Results原稿を改善 する	* 学生Cの第一稿の改善点を話し合う * 各自、推敲する
11	Discussionを執筆す る	* 8 つの健康概念のうち、心の健康(Mental Health:MH)に焦 点を絞って、自分のスコアについてペアで話す * To improve MHというタイトルのミニレクチャーを聞いて メモを取る * ミニレクチャーの内容をペアの相手に英語で伝える * 各自、第一稿を執筆する
12	Discussion原稿を改 善する	* <i>I think</i> を使わずに表現する方法に関する指導 * 各自、第一稿を推敲する
13	全体を改善する	* 個別指導の後、清書、提出する
14	まとめ	* 自分のQOL度について英語で話し合う * レポート執筆を通して学んだことをまとめる

英文レポートの執筆は、学生にとってハードルの高い課題である。本コースでは、上述したプレ・タスク、タスク、フォーカス・オン・フォームという手順を踏めば、最終的にはレポートが仕上がるように工夫した。例えば、Introductionの執筆にあたって、学生は前時にSF-36が測定する8つの健康概念についての英文マニュアル¹⁾の解説を読み、その概念について自分の言葉で何も知らない人にわかりやすく説明する英文を書く。これがプレ・タスクとして機能し、レポート原稿執筆というタスクに取り組みやすくなる。さらに、原稿執筆後、受動態の指導や教師からのフィードバックがフォーカス・オン・フォームとして機能し、学生はそれをもとに推敲を行うことになる(表1参照)。

学生の書く英文が指導を通してどのように変容していったのかを、学生Bのレポートの最初の部分を例にとり示す。第一稿執筆後、提出させ、訂正が必要な箇所を教師が次のように下線や挿入記号等を入れた。なお、下線は、訂正が必要ということの意味する。

SF-36 means a measure ~~mean~~ to assess QOL. SF-36 is classified 8 concepts. It is use to assess how effectively medical facilities function and it is use to promote health of clients. It assess^v from the perspective of clients. Clients is all people above age of 16.

次の時間、教師は、学術論文で比較的多用される受動態についてのフォーカス・オン・フォームを行った。学生は、それを参考に、上の原稿を次のように修正した。

SF-36 is a measure to assess QOL. SF-36 classifies health into 8 concepts. It is used to assess how effectively medical facilities function and it is used to promote health of clients. It assesses QOL from the perspective of clients. Clients is all people above age of 16.

さらにこの原稿は推敲を重ねて、最終的に以下のような完成原稿となった。

SF-36 is a measure to assess Quality of Life (QOL). It classifies health into eight concepts in Japan. The eight concepts are “physical functioning(PF)”, “role-physical (RP)”, “bodily pain (BP)”, “general health (GH)”, “vitality (VT)”, “social functioning (SF)”, “role-emotional (RE)” and “mental health (MH)”. SF-36 assesses QOL (i.e. functional status and well-being) from the perspective of clients. The clients are all people

above age of 16. SF-36 is used to assess how effectively medical facilities function. Also, it is used to promote health of clients.

Ⅳ 授業評価

Ⅱで挙げた3つの行動目標が達成されたかどうかという点に関しては、受講生6人全員が目標のすべてを達成することができた。

さらに、このタスク中心型指導で意図された習得プロセスが学生の内部で起こったかどうか、つまり、意味伝達するという経験の中でその意味を表す言語形式に学生自身が気づいたかどうか、ということを見るために、授業最終日に、授業評価の一環として、学生に感想文を書かせた。感想文の中のコメントのうち、(1)QOLという意味内容に関するコメント、(2)言語形式への気づきに関するコメントとみなすことのできるもののうち代表的なコメントを以下に示す。

(1) QOLという意味内容に関するコメント

ア) QOLは私たちにとってすごく身近なものということがわかりました。

イ) 自分自身のQOLを測ったのは初めてだった。そのことについてレポートを書いたので、自分のQOLについて考えることができた。

ウ) QOLという身近なものを測ることで、実感がわくし、それぞれの考え方があるので、個々の考え方を聞くのが楽しかった。

(2) 言語形式への気づきが起こるまでの努力とその結果気づいたことに関するコメント

エ) 文を作るのは難しいなと改めて実感しました。高校時代に比べて文法も単語もぜんぜん使えなくて悲しくなりました。今回は今まで書いたことのない評論形式だったので、受動態と能動態の使い分けが大変だったのと、感想文ではよく使うI think～が使えなくて他の表現を使うというのがすごく難しかったです。でも、書いているうちに受動態と能動態の使い分けができるようになってきたし、I think～以外の表現を学んだことで、これから英文を作る機会があれば、表現に幅ができるようになるのでよかったですと思います。

オ) 今まで教科書に出てくる単語を調べるために辞書を使っていたけど、今回は自分の知りたいことばを調べられたのもよかったと思う。

カ) becauseを独立させて使えないことを学んだ。

キ) レポート作成の際に、今まで書いたことがなかったので、初めの文に5文字あける、don'tなど短縮して書かないということを知りませんでした。今回それを学ぶことができたので、将来英語でレポートを

書く際には正しいレポートの書き方で作成できると
 思います。

- ク) 苦勞した点は、自分の言いたいことがうまく英語
 で表現できなかったことです。自分の知っている単
 語を使っても、それよりもっと適切な単語があっ
 たりし、別の使い方があったりして、なかなか思う
 ように伝えられませんでした。しかし、先生のアド
 バイスで、今まで使っていた単語や表現にはもっと
 適した単語や使い方、文法があることを知ることが
 でき、とてもよい解決法となりました。
- ケ) 普通に使う文と、レポートでは同じ意味でも適切
 な単語があって場面によって使い分けることが大切
 だとわかりました。
- コ) 最初に書いたときは、自分でもよくわからず、と
 にかく書いていたが、次第に文章になっていく感じ
 を受け、訂正の箇所も徐々に減ってきたのがうれし
 くもあり、提出する意欲になった。

V 考察

本コースは、行動目標の達成という点からは成功だっ
 たといえる。さて、タスク中心型指導の真のねらいは、
 行動目標達成それ自体にあるのではなく、タスク遂行を通
 じて目標言語の習得に不可欠とされる認知プロセスを引
 き起こすことにある、という点に注意すべきである。本
 コースのタスク中心型指導を通して、意味から形、気づ
 きというIで述べた認知プロセスが学生の頭の中で起
 こっていたことが、感想文から推測される。つまり、
 QOL測定を通して学生はまず、自己のQOLについての
 考察を行い、伝えたい意味内容を意識した（感想文ア、
 イ、ウ参照）。次に、それをどのような言語形式にのせて
 表現するかを模索し、実験的に文を作ってみた（例、感
 想文エ、オ）。そして、教師のサポートを得ながら、原稿
 を改善していった（例、感想文ク、コ）。その中で、より
 望ましい言語形式についての気づきがあった（例、感想
 文エ、カ、キ、ク、ケ）と推測される。

では、この認知プロセスを媒介として、結果的に、学
 生の英語能力の伸長がどの側面でどの程度起こったの
 か。今回の指導では、そのことに対する検証は行われて
 いない。その検証を行うことが、質の高い指導を行う上
 で必要である。第2言語習得研究と教育実践の統合を図
 りながら、計画・実施・評価・修正のサイクルを確立す
 ることが課題である。

謝辞

SF-36を使ったQOL評価に関して、新潟医療福祉大学
 高橋榮明学長より助言を賜りました。深く感謝申し上げ
 ます。

文献

- 1) Wara, J. E., Kosinski, M. and Gandek, B. :
 SF-36 Health Survey ; Manual & Interpretation
 Guide. Lincoln, RI, Quality Metric, 2005.
- 2) Sekhan, P. : A Cognitive Approach to Language
 Learning. Oxford, Oxford University Press,
 1998.
- 3) Willis, D. and Willis, J. : Doing Task-based
 Teaching. Oxford, Oxford University Press,
 2007.
- 4) 福原俊一, 数間恵子 監訳: QOL評価学 測定, 解析,
 解釈のすべて. 中山書店. 2005.
- 5) 福原俊一, 鈴嶋よしみ編著: SF-36日本語版マニ
 ュアルv1. 2. (財)パブリックヘルスリサーチセン
 ター. 2001.

註

(註1) SF-36の使用に当たっては、QualityMetric
 Incorporatedからライセンスを取得した。License
 Number : FC 1-042408-35670